古事類苑

器用部七

容飾具二

〔新撰字鏡〕木梳、櫛、同色魚反、櫛、久志、

〔倭名類聚抄十四容飾具〕櫛　說文云、櫛、側瑟反、和名久之、梳枇總名也、

〔東雅八器用〕櫛クシ　伊弉諾神、並に素戔烏尊の湯津爪櫛、鹽土老翁の玄櫛などいふもの見えたれば、舊事、古事、日本紀等の書に、因來る所すでに久しき物也、そのクシといひしは義詳ならず、釋日本紀に、並訓久志といふ事見えたり、櫛をクシといふも、並之義と見えたり、異朝にして櫛比といふはよのつねなり、

〔源氏物語十七繪合〕院雀○朱略にもかゝることきかせ給て、うめつぼに御ゑどもたてまつらせ給へり、○中御せうそこはたゞことばにて、院の殿上にもさぶらふ、左近中將を御つかひにてあり、かの大ごくでんの御こしよせたる所のかう〳〵しきに、

身こそかく玄めのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせず、とのみあり、聞え給はざらんもいとかたじけなければ、くるしく覺しながら、昔の御かんざしのはしを、いさゝかおりて、玄めのうちはむかしにあらぬ心ちして神代のことも今ぞこひしき、とて花だのからのかみにつゝみて參らせ給、

〔歷世女裝考二〕櫛をかんざしともいひし事